

(31) 沢田「初期の黄天道」三五四頁、参照。

(追記) 国会図書館所蔵の宝巻のすべてに東亜研究所の蔵書印があると書いたが、20と39の二部にはそれが無いことが再度の調査で明らかになったので、訂正しておく。また、26に見える「通天六冊」は、『普静如来繪巻主巻』の巻首題が「普静如来繪巻古仏通天冊」となっているというから(沢田『増補宝巻の研究』二一七頁)、『普静如来繪巻主巻』のことであろう。

R・K・テラーダ著

## 蓮根の盗難

原 實

七人の行者とその従者が池に沐浴する間に、彼らが食用のために採取しておいた蓮根が何者かによって盗まれ、ために彼らは互いの嫌疑を怖れてそれぞれ己が信ずるところを披瀝して誓言なし、身の潔白の証しを立てる物語は古代インドの文学に一主題を形成している。盗みの犯人は擬装せる帝釈天で、彼は行者達の無欲の程を試さんとこの拳に出たが、彼らの無欲が明らかとなるに及び、その徳を讃えて彼らを天界に導いた。叙事詩マハーバーラタ第十三巻に二度語られ、パー

批評と紹介 原

リ・ジャータカ四八八に「蓮根本生」(Rishajataka)として知られるこの物語が、細部の異同を措けば同一の起源に溯り得ることに疑いを容れない。ヒンズー教徒、仏教徒、ジャイナ教徒がそれぞれの仕方<sup>(1)</sup>で無欲・無所有の同一主題を中心に類似の物語を伝えている事例は古代インドにしばしば見られるところで、曾ってヴィンテルニツはこれらを Astehen-dichtung と呼んだことも人の知るところである。<sup>(2)</sup>近時、叙事詩マハーバーラタとパーリ・ジャータカの主題及び詩句との並行関係について注目すべき研究が就中ドイツの学者によって推進されているが、ここに紹介せんとするテラーダ<sup>(3)</sup>の新著もこの研究動向の一環をなしているもののように思われる。

- (1) 短い序文に続いて、本書は次の七章より成っている。
  - (1) マハーバーラタに於ける蓮根盗難物語
  - (2) パーリ・ジャータカ及びジャータカ・マラーに於ける蓮根盗難物語
  - (3) プラーナに於ける蓮根盗難物語
  - (4) その他の物語文学に於ける類話
  - (5) マハーバーラタとパーリ・ジャータカ所伝の比較
  - (6) 蓮根盗難物語の所謂二先駆
  - (7) 蓮根盗難物語の原初形態

卷末は英文要旨、略語表、文献目録、索引によってしめくられてゐる。

以下に本書の内容を概観するが、ここでは便宜上、本書の叙述の順序には従わず、先ず本邦に知られてゐる仏教所伝の物語に即して解説することとする。

パーリ・ジャータカ四八八によれば、菩薩はバラモン家に七人兄弟の長子として生まれ、末には一人の妹があつた。若くして世俗を厭離した彼は両親の歿後弟妹と僕人一人、婢一人、友人一人を伴ひ、総勢十一人で森に入つて行者となつた。彼らは日々当番を定め、一人が森に入つて食餌を採取し、十一等分して定時に鐘を鳴らすと他は自庵より出て自分の分け前を取つて帰り、互いに修行の障げになることがなかつた。ここに帝釈天は彼らの離欲の程を試さんと、三日にわたつて長兄の分け前を隠蔽したから、彼は三日間食餌にありつくことが出来なかつた。三日目になつて彼は皆を集めて自分の分け前の行方を訊ねるが、それほもとより他の与り知らぬところであつたから、彼らは盜難の事実に驚く。しかし、長兄の嫌疑を怖れた次兄が自ら誓言して身の潔白の証しを立てると、残りの者も順次同じような仕方であつた。それぞれ離欲に特徴づけられた誓言をなした。更に同じ森に棲む樹木の精(夜叉)、象、猿もこれに参加して、これら誓言が一連の韻

文詩句となつてゐる。最後に帝釈天は自分の姿を頭わして自ら盜みの事実を白状し、その動機を語り、菩薩に許しを乞うて天に帰る。一方、行者達はこの後も修行に励んで梵界を得たといわれる。

聖勇 (Aryasā) のジャータカ・マラー第十九章はこの物語に文學的洗練を施して梵語に譚案したものと云われるが、細部に於いては可成り異なり、詩文の数も増広されてゐる。著者はこの物語を仔細に検討して、聖勇が恐らくは東部方言 (Ostprache) によつて伝えられていた不完全な一写本に拠つてこれを著したであろうと推測してゐる。以上が仏教徒の伝える「蓮根盜難物語」の要約で、本書の第二章の内容を成してゐる。

これと同巧異曲の物語はマハーバーラタ第十三巻に相い次いで二箇所伝えられてゐる。それらは MBh. 13. 95. 50-86 と 13. 96 とに於いてであり、著者は前者を便宜上 MBh. I 後者を MBh. II と名づける。この中 MBh. I は MBh. II と異なつて本来の蓮根盜難物語 (Lotus-diebstahl-geschichte) をより大きな梓物語 (Kahmererzahlung) の中にはめこんでゐるから、著者は MBh. I に先行する部分 (MBh. 13. 94. 1-44, 13. 95. 1-49) を MBh. I. 0 とつて別立する。この先行部分はウリシヤードルビ (Vrīśādhī) 王と七人の仙人の問答 (samvāda) と題される古譚 (tīhāsa purāna)

で、ここで王は先ず飢餓に悩んで人肉を料理している七仙とアルンダティ、それに従僕の夫婦の十人を豪華な贈物で誘う。然るに仙人達は王の贈物を苦行の障りとして斥け、王と袂別して遊行者となり、或る蓮池に到った。その間に彼らはシュナハサカ(Sunahaska)という行者に出会い、行者の群は斯くて総勢十一人となる。一方、贈物を拒まれた王は怒り、鬼女(Kritya, Yandhana)を創出し、彼女によって彼ら行者を殺そうと謀った。斯くて彼ら十一人が蓮池に蓮根を採ろうとした時、鬼女はこの池の守護者となって現われ、名を名乗らぬ限りは蓮根を採取してはならぬと言う。名を知ればその人を制するという所謂 Namsanzuber を怖れた彼ら行者は順次謎めいた通俗語源で自分の名を語り、蓮池に降りるを許されたが、最後に彼女がシュナハサカを咎めるに及んで、彼は逆に彼女を灰と化し、十人の行者を鬼女の危険から救った。斯くて彼らは安んじて蓮根を採ったが、それらを岸に置いて沐浴する間に例の盗難事件が起つて、本来の蓮根盗難物語 (MBh. I) となる。ここに十一人は互いの嫌疑を晴らすために誓言をするが、犯人はシュナハサカに変装していた帝釈天で、彼は盗みの事実を告白し、彼らの無欲(abbha)を讀え、且つは彼らを鬼女より救ったことを明らかにする。事実を知った彼ら十人は悦び、帝釈天と共に天界に赴いた。

MBh. II は蓮根盗難物語のみを伝えるが、登場人物は既

述の十一人より、アガステイヤ仙以下の二十八人となり、他に又聖地巡礼の功德が謳われている。人数こそ大幅に増広されているとはいへ、アガステイヤが盗難の被害者となって他をなじり、その結果残りの二十七人が誓言を余儀なくされる条はむしろさきのパーリ・ジャータカに近く、諸伝承の出入がここに漸く問題となる。蓮根盗難物語のみを伝えている点でも MBh. II は仏教徒の伝承に近いように思われるが、著者は内容・語法の観点より仔細に比較検討して、パーリ・ジャータカが MBh. II よりもむしろ MBh. I を下敷としている事実を明らかにした。

第三章で著者はパドマ・プラーナ (Sṛiṣṭikāṇḍa. 19. 193-273, 19. 339-369) とスカンダ・プラーナ (6. 32. 1-63, 6. 32. 64-100) に伝えられる同類の物語を論ずる。共に MBh. I にみえた梓物語と蓮根盗難物語を伝えるが、怒れる王の創出した鬼女の条はプラーナ文獻にはみえない。両つの伝承を比較する時、スカンダ・プラーナはそのシヴァ教的宗派色 (śiva-īṅga) や昇天功德の拒否等の新しい要素を除けば概してパドマ・プラーナに拠っていることが明らかとなる。一方、パドマ・プラーナは MBh. I. 0 の梓物語を簡略化し、その上に MBh. I に拠って盗難物語・誓言物語を伝えるが、MBh. II にしか現われない要素もここにみられる。斯くて著者はプラーナ作者が叙事詩の二つの伝承をよませつつ、多

分に MBh. I に拠つてこの物語を伝えた事情を明らかにした。

第四章には類話として MBh. 3. 151. 1-152. 22 と MBh. 3. 296. 8-297. 56 が取り上げられる。前者はデーマが羅刹の守護する蓮池に入り、羅刹に咎められ、逆にそれを退治した物語であり、後者は夜叉の守護する池の辺で夜叉とユッディシテイヤの交わす謎問答の物語である。この他著者はここで十王子物語第六章にみえるミトラグプタと羅刹との謎問答<sup>(4)</sup>や、アンパチョーラ・ジャータカ(三四四)等に言及している。

以上、蓮根盗難物語とそれに先行する梓物語の重要な所伝を比較対照し、その結果を著者は本書の第五章に十二項目に分けて表示した。ここに読者は仏教徒の二伝承 (Pali Jataka 488, Jatakamala 19) / 叙事詩の二伝承 (MBh. I, II) とンラーナの二伝承 (Padma, Skanda) の出入、異同の実態を一目瞭然と窺い知ることが出来る。

第六章にはこれら諸伝承の誓言中にみえた類句が古くアイタレーヤ・ブラーフマナ (5. 30. 10-11) にみえる事実、治病の蓮根の物語がマハーヴァツガに語られること、更に蓮根本生に基づく彫刻がバルフットの遺跡にみえることが指摘されている。

第七章は結論で、著者はここでこの古代インドの物語の原

初形態を想定する。即ち蓮根盗難の原初物語に在つて登場人物は七仙を始めとする十人 (アルンダテイーと従僕の夫婦を含む) で、帝釈天も既にここに在り、シュナハサカ (犬を伴う者の義) を装つては彼らを試し、正体を顕わしては彼らを讃える。讃える徳は無欲 (aloha, atema) であったが、それは解説よりも昇天を約するものであった。物語は蓮池を舞台とし、帝釈天による蓮根盗難の試練に會つて、行者が互いに無欲に彩られた誓言をなして身の潔白の証しを立てるといふ筋のもので、この原初物語が多様に潤色される間に伝承が分岐するに至つた。その分岐の様態は Stammbaum の形で本書一七一頁に図示されている。

以上 Terrada 女史の研究の概要を説いたが、この中で、叙事詩と仏教徒の伝承との並行関係は既に一九一〇年 J. Charpentier によつて指摘、研究され、彼はこれら諸伝承の淵源に alte Ithasasammlung のあることを想定した<sup>(5)</sup>。また、本書第六章に扱われるところも既に K.F. Geldner の指摘したところであつた。従つて今回の研究の眞の新らしさはブラーナ文献の伝承の指摘・研究に留まる。しかし、J. Charpentier の研究に準拠しつつ、それを大幅に敷衍し、伝承の系統を体系的に明示した功は著者に帰せられ、且つ類話の集められている点にも多分の新鮮味がある。但し、蓮根盗

難の粹物語は「謎解き」と不可分で更にこの面への顧慮が望まれ、鬼女との問答にみえる *Namenzauber* に比較されるべきものも少なくなく、又帝釈天の試練物語は彼の聖仙誘惑物語と不可分である。立誓 (*sapatha*) も又古インドの伝統に裨さし、無欲披瀝の誓言の内容は文化史的にみても興味なしとしない。

一切の印刷物は誤植・誤記を免れず、本書の中にもそれらを若干指摘することが出来る。

これを要するに本書は *Biśa-stainyopākhyāna*, *Biśa-jātaka* として知られる古代インドの *Asketendichtung* を広範囲の文献にわたって比較研究し、その研究に二つの方法論を提示したものと評価される。しかし、筆者が敢えて本書をここに紹介した理由は又別にある。上來闕説し来た *Asketendichtung* の中の或るものは当然のことながら仏教徒が伝えて、その系譜は *チムンツァ*、漢訳仏典中に継承されてくる。従って、本生経類を踏まき、これに叙事詩やジャナナ教の伝承を考慮して比較研究する場合に、漢訳・チムンツァ文獻を駆使し得る立場に在る本邦学者には、インド文学のこの分野に貢献し得る広大な領域が拓かれていくであろうとが得る。ここに著者ナーラダ女史の功を讃え、その研究の方法論を紹介しつつ、本邦学者に有利な研究領域のあることを付言する

批評と紹介 原

に留めず。

註

(1) M. Winternitz, *Geschichte der indischen Literatur*, I (Leipzig, 1907), pp. 348ff. and *Some Problems of Indian Literature* (Indian Reprint, New Delhi, 1977), pp. 21-40.

(2) 同、同、叢書 (Freiburger Beiträge zur Indologie) ① H. Falk, *Quellen des Pañcatantra* (1978) ② 中 *Pañcatantra* ③ *Motif* ④ 中 *Pañcatantra* ⑤ *Pañcatantra* ⑥ *Motif* ⑦ 中 *Pañcatantra* ⑧ *Motif* ⑨ 中 *Pañcatantra* ⑩ *Motif* ⑪ 中 *Pañcatantra* ⑫ *Motif* ⑬ 中 *Pañcatantra* ⑭ *Motif* ⑮ 中 *Pañcatantra* ⑯ *Motif* ⑰ 中 *Pañcatantra* ⑱ *Motif* ⑲ 中 *Pañcatantra* ⑳ *Motif* ㉑ 中 *Pañcatantra* ㉒ *Motif* ㉓ 中 *Pañcatantra* ㉔ *Motif* ㉕ 中 *Pañcatantra* ㉖ *Motif* ㉗ 中 *Pañcatantra* ㉘ *Motif* ㉙ 中 *Pañcatantra* ㉚ *Motif* ㉛ 中 *Pañcatantra* ㉜ *Motif* ㉝ 中 *Pañcatantra* ㉞ *Motif* ㉟ 中 *Pañcatantra* ㊱ *Motif* ㊲ 中 *Pañcatantra* ㊳ *Motif* ㊴ 中 *Pañcatantra* ㊵ *Motif* ㊶ 中 *Pañcatantra* ㊷ *Motif* ㊸ 中 *Pañcatantra* ㊹ *Motif* ㊺ 中 *Pañcatantra* ㊻ *Motif* ㊼ 中 *Pañcatantra* ㊽ *Motif* ㊾ 中 *Pañcatantra* ㊿ *Motif* 1. 128 (*Bilāra*) and 384 (*Dharmadhara*): *MBh.* 2. 38, J. 481 (*Takarya*): *MBh.* 2. 59. ("The Oldest Sanskrit Fables," *Adyar Library Bulletin* vols. 31-32, 1967-68, pp. 313-352.)

① *Pañcatantra* ② *Motif* ③ 中 *Pañcatantra* ④ *Pañcatantra* ⑤ *Pañcatantra* ⑥ *Motif* ⑦ 中 *Pañcatantra* ⑧ *Pañcatantra* ⑨ *Motif* ⑩ 中 *Pañcatantra* ⑪ *Pañcatantra* ⑫ *Motif* ⑬ 中 *Pañcatantra* ⑭ *Pañcatantra* ⑮ *Motif* ⑯ 中 *Pañcatantra* ⑰ *Pañcatantra* ⑱ *Motif* ⑲ 中 *Pañcatantra* ⑳ *Pañcatantra* ㉑ *Motif* ㉒ 中 *Pañcatantra* ㉓ *Pañcatantra* ㉔ *Motif* ㉕ 中 *Pañcatantra* ㉖ *Pañcatantra* ㉗ *Motif* ㉘ 中 *Pañcatantra* ㉙ *Pañcatantra* ㉚ *Motif* ㉛ 中 *Pañcatantra* ㉜ *Pañcatantra* ㉝ *Motif* ㉞ 中 *Pañcatantra* ㉟ *Pañcatantra* ㊱ *Motif* ㊲ 中 *Pañcatantra* ㊳ *Pañcatantra* ㊴ *Motif* ㊵ 中 *Pañcatantra* ㊶ *Pañcatantra* ㊷ *Motif* ㊸ 中 *Pañcatantra* ㊹ *Pañcatantra* ㊺ *Motif* ㊻ 中 *Pañcatantra* ㊼ *Pañcatantra* ㊽ *Motif* ㊾ 中 *Pañcatantra* ㊿ *Pañcatantra* 1. 128 (*Bilāra*) and 384 (*Dharmadhara*): *MBh.* 2. 38, J. 481 (*Takarya*): *MBh.* 2. 59. ("The Oldest Sanskrit Fables," *Adyar Library Bulletin* vols. 31-32, 1967-68, pp. 313-352.)

397-406) なるべし。

この種の比較研究は既に O. Franke (WZKM. 20, pp. 317-373), J. Charpentier [次の註(5)(6)参照], E. Leumann (WZKM. 5, pp. 111-146 and 6, pp. 1-46), H. Lüders (*Philologica Indica*, pp. 1-43, 47-73 and 80-106) 等の手記にたゞしなれば、その研究史總論は容易とせらるべし。Motif や章句の類似を扱ったものとして次に数例を挙げておく。

W. Rau, "Bemerkungen und nicht-buddhistischen Sanskrit-Parallelen zum Pali Dharmapada," (*Manamuktavali*, New Delhi, 1963, pp. 159-175)

A. Mette, "Eine jainistische Parallele zum Musika-Jātaka," *Studien zum Jainismus und Buddhismus*, Gedenkschrift L. Alsdorf (Wiesbaden, 1981), pp. 155-161.

Ruzica Cikak-Chand, *Das Samajātaka, Kritische Ausgabe, Übersetzung und vergleichende Studie* (Bonn, 1974) (J. 540 and Rāmāyana 2. 63ff.)

尚、根本有縁群中の物語の比較上の研究としては、Z. 氏の便覧や諸書に引く。

J. L. Panglung, *Die Erzählstoffe des Malasarvāstivāda-vinaya*, analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung (Tokyo, The Reiyukai Library, 1981)

本邦学者の研究として次のものが注目されるべきであらう。

村上真定「無縁の無所有——パーンパーラタと仏教(二)」  
『東北大学文学部研究年報』69、一九七九、一四一—  
一一三頁。(MBh. 12. 168-171).

(3) 拙稿「三度の」(『田村芳朗博士還曆記念論文集』昭  
57年、春秋社)、五三六頁(註15)参照。

(4) 田中於菟弥、指田清剛訳『十王物語』(平凡社、東  
洋文庫33)、一六九頁。

(5) J. Charpentier, "Studien über die indische Erzähl-  
literatur," *Zeitschrift der D (deutschen) M (or-  
genlandischen) G (gesellschaft)* 64, pp. 65-83.

(6) K. F. Geldner, "Zur Geschichte von Lotusdiebstahl,"

*ZDMG.*, 65, pp. 306-307. Cf. also J. Charpentier,  
*ZDMG.*, 66, pp. 38-48.

(7) Cf. for example, a passage in the *Kinnari-jātaka*  
(P. S. Jaini, "The Story of Sudhana and Manoharā,"  
*Bulletin of the School of Oriental and African*  
*Studies* 29 (1966), p. 537 and D. Schlingloff, "Prince  
Sudhana and the Kinnari," *Indologica Taurinensia* I  
(1973), pp. 155ff.)

(8) Cf. L. Sternbach, *Indian Riddles* (Hoshiarpur,

1975), pp. 22-25. L. Renou, *Anthologie Sanhrite* (Paris. 1961) pp. 110-114.  
 (९) Cf. M. Hara, "Indra and Tapas," *Adyar Library Bulletin* 39 (1975), pp. 129-160.  
 (१०) H. Lüders, "Der indische Eid," *Varuna* II (Göttingen, 1959), pp. 655-670.  
 (11) p. 5 (-8) Viśādarbhi for Viśādarbhi; p. 36 (-3) Kauravendra for Kuruvendra (MBh. 13. 96. 42); p. 43 (+9) MBh. I (95. 56-74) for (95. 56-47); p. 54(+3) -prayuktaiśā for prayuktaiśa (+11) śāśvato nityam for śāśvato nityam; p. 71 (-1) mir richtigger for mit richtigger; p. 85 (+8) mayham hi tayo for tayp (Pīt 4. 305. 17); p. 88 (+3) nidrā for nidra (Jm. 19. 25);

p. 95 (+15) ālokasandhim for āloksandhim (Jm. 19. 21); p. 112 (-1) Gampert for Gambert (also in p. 184); p. 113 (+18) Viśvāmitra for Viśvāmītra; p. 118 (+18) liṅgaṃ for liḡgaṃ; p. 130 (+12) Dakṣiṇā for Dakṣiṇā; p. 135 (+9) anṛtaṃ bhāṣatu for ghāṣatu (MBh. 13. 95. 72); p. 146 (-11) Brahmodyas for Brahmadyas; p. 152 (+9) śīla for śīla; p. 157 (+5) Śunahakha for Śunaksakha; p. 169 (-3) Kṣatriyas for Kṣtriyas  
 (Rosa Klein Terrada, *Der Diebstahl der Lotusfassern*: Freiburger Beiträge zur Indologie, herausgegeben von Ulrich Schneider, Band 15. Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1980. 185p.)